



Title	舞踏における型の存在 : 2つの稽古ノートを用いた比較研究
Author(s)	藤田, 明史
Citation	デザイン理論. 2014, 63, p. 100-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56298
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

舞踏における型の存在

— 2つの稽古ノートを用いた比較研究 —

藤田明史／関西学院大学大学院博士後期課程

現在、舞踏技法研究における問題点は、創始者である土方巽のその神格化された性格にある。例えば土方の七回忌に行われたシンポジウムでは、舞踏にメソッドは存在するかが議論的になり、結果「触らぬ神」扱ひされ、土方の神秘性が高まることとなる。この事態は舞踏研究において大変な足かせとなり、以後の舞踏のメソッドの研究が遅れをとる原因になった。しかし、近年になるにつれ、実際に土方に弟子入りした舞踏家達の研究が盛んとなっている。当時、土方に師事した弟子の三上賀代や和栗由紀夫に代表されるように、実際に土方の指導を受けた舞踏家達による技法研究では、その秘伝といわれるノートをもとに、土方舞踏の詳細な分析が行われている。また、慶應義塾大学における土方巽アーカイヴでは公演の記録、批評家たちの発言をもとに、作品研究がおこなわれている。ただし、いずれにしても、舞踏研究の問題点として挙げた神格化された土方巽の舞踏に悪い意味で研究が集中しており、体系的な舞踏の研究は数が少ないのが現状である。

暗黒舞踏の技術は主に1970年代の作品において練り上げられ、土方の技法として定着した。したがって、技法分析の場合は、現在までに対象とされているのは1970年代以降の技法確立時期に発表された作品に限られている。土方自身のソロおよび、弟子に振付けられた動きは現存する舞台記録フィルムや、当時のテレビ番組の映像資料からその一部をうかがうことができるが、土方自身が踊る際の技法と、土方が弟子たちに振付け、指導した技法とは区別して考察されなければならない。

和栗由紀夫(1952-)は1972年より土方巽(1928-1986)に師事した舞踏家、振付家である。自身の舞踏活動を行うかたわら、1998年に土方の舞踏を独自に分類、映像化したCD-ROM『舞踏花伝』を出版した。『舞踏花伝』は和栗自身の稽古ノートをもとに作られており、土方の技法を7つのグループに分類している。また、『舞踏花伝』は個々の舞踏譜に相当する動きや型を再現できるように、CD-ROMという形式の利点を生かした一種のアーカイヴとしての役割を果たした。ただし、和栗は舞踏の型をイメージで限定することには慎重で、「本作中の舞踏譜の動きは和栗自身の解釈で、個人によってまた別の解釈ができる」と注釈を入れている。

一方、1970年代以降の土方の技法をめぐる考察のもう1つに、三上賀代の著作『器としての身体』(1993)がある。三上は自身で記録した稽古ノートと、他に2人の弟子が記録した当時の稽古ノートをもとに、土方の技法を分類し、構成している。具体的には、指導の際の土方の言葉が、動きを導き出すためにイメージを喚起するものとして記録され、語彙集として列挙されている。ただし、ここでは語彙を並べているだけにとどまり、分析は加えられていない。

舞踏譜はあくまで土方巽の弟子たちの手でまとめられたものである。土方自身が体系だてした舞踏譜を残していないことに着目すれば明らかなように、土方はあくまで口伝を用いて弟子たちに対してのみ舞踏を伝授しようとしていた。とはいえ、舞踏の全体を通して、不明瞭ではあるにしても、ある統一的な

「型」の存在を確認することは不可能ではない。

よって本発表では和栗の『舞踏花伝』をベースに、三上の著書『器としての身体』における舞踏譜と一般的な舞踊譜との比較を通して、舞踏を貫く「型」の特徴を明らかにしたうえで、この舞踏譜の存在が、はたして舞踏においてどのような意義をもつのか、考察をおこなった。結論を簡潔に述べておこなうならば、この両者の舞踏譜は、神格化された土方の舞踏から脱却するにはいたらなかったものの、弟子たちにもみ伝わった土方の技法を集約、出版し、舞踏を一般に解放しようとした点で評価される試みであると言えよう。

本発表では具体的に、和栗由紀夫『舞踏花伝』の映像を用いた振付の分析と、三上賀代の著作『器としての身体』の舞踏譜を用いた振付の成立過程の考察をおこなった。この両者に共通する点として、土方の舞踏譜を型という言葉に限定することに躊躇し、舞踏譜はあくまで画一的な型ではなく、動きを生み出す要因を喚起する手助けになるものだとの見解を示している。その点から推測するに、三上もまた和栗同様、舞踏譜を用いた踊り手独自の解釈を求めていたと考えられるのである。

ここでいったん、舞踏の振付の一連のプロセスをまとめておく。

- ・土方による動きの開発
- ・土方による言葉の発信
- ・弟子による言葉の記録
- ・弟子による動きの発現
- ・弟子による身体化された言葉の記述

舞踏の振り付けは以上の5つのプロセスからなる。土方が絵画やいきものなどからイメージを湧かせ、そのイメージを言葉として弟子たちに発信する。その言葉をテキストと

して弟子たちが稽古ノートとして記録する。その稽古ノートをもとに、振付が行われ、その振付と言葉との合致が舞踏として残されたのである。和栗は、舞踏花伝中の舞踏譜の動きは和栗自身の解釈で、個人によってまた別の解釈ができるといい、三上はその著書の中で舞踏譜についてあくまで動きを生み出す要因を喚起するものとしてとらえている。両者に共通することは、舞踏における型とは個々人がそれぞれ舞踏譜からイメージを呼び起こし、また新たな動きを生み出すものだということである。一般的な舞踊における型とは、訓練を積み重ね、無駄な動きを排除したいわば踊りの到達点であるのに対し、舞踏における型とは、そこから新たな動きを生み出す出発点としてとらえることが出来ると言えよう。

本発表では、「型」という視点から和栗、三上の両者における舞踏譜が持つ意義について考察を行った。型を厳密に定めて、神格化された土方異から脱却しようとするのはいまだ叶わなかったものの、弟子たちにもみ伝わった土方の技法を集約、出版し、舞踏を一般に開放しようとした点で、評価される試みであると言えよう。

最後に、今後の課題として以下の点を述べたい。それは言葉による記述がはたして記譜にあたるか、という根本的な疑問である。この言葉による記述と記譜法との差異について今後の研究の課題としたい。